
八百万屋。

暁黒狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八百万屋。

【Nコード】

N6289C

【作者名】

暁黒狼

【あらすじ】

ある日、酷いいじめを受けていた少年が不思議な店と出会う。それは、彼の運命を変える出会いだっただ。

（前書き）

HPに掲載しているネタです。
誰でも見れるような内容…なはず。

八百万屋

八百万屋とは神を売る店。

神の数は八百万。人の運命を変えるなど容易き事。

『死にたい』

これが数時間前まで彼、康太が考えていたことである。

康太はクラスでいじめにあっており、今日も散々な目にあってきたばかりであった。

所々に出来た痣が、じんじんと痛む。

顔を上げれば、自然と背の高いビルばかりが目につく。

(いっその事、あのどれかから飛び降り自殺でもしようかな…)
ところが、どの建物も康太の歩みに合わせてゆっくりと後方へ流れていく。

無理だ。そんな度胸はない。

ふいに、視界の　しかも真正面に、古ぼけた家が現れた。

「うわあ?!」

驚きの余、思わず飛び上がってしまう。

それにしても、本当に古い家である。苔まみれだ。手入れをしている様子もない。

この苔がなければ、立派な日本家屋となるのだろうか…。

どうやら何かの店を営んでいるらしく、屋根に看板がかかっていた。

辛うじて、八百万と読める。

この異様な雰囲気気圧されたのか、それともそれは必然だったのか…。

何かに引き寄せられるように、康太はふらふらと店の中に入った。

店内はさらに変わっていた。見渡す限り筒、筒、筒。

大きさ、長さはそれぞれで、それらの全てが天井から吊り下がっている。

人はいないのかと探してみると、いた。店の中央に置かれたいかにも高級そうなソファアームに座り、

それはそれは美味そうに煙管を吸っている。

服装は喪服かの如く黒い和服の下に、龍の刺繍が入ったジーパンを穿いていた。

奇怪な筒や服装を除けば、たいそう美しい女性であった。

「いらつしやい。」

彼女は目の前に置かれているテーブルの上に肘をのせると、早速商談を始めた。

「八百万屋へようこそ。当店では全国各地におられる八百万の

」

「ちよ、ちよつと待って！」

話が飲み込めず、康太がストップをかける。

「何か。」

「八百万って…何？」

女は一瞬、顔を引きつらせ

「知らざあ言って聞かせやしょう！」

そう言っや否やテーブルを足場にし、一蹴りで康太の前へとやってきた。

反射的に後退りする康太。

「八百万とは即ち神の数。神とは即ちこの世のありとあらゆる形、自然、力…。八百万屋とは即ち、」

そこで彼女はニヤリと笑った。

「神を売る店。」

「神を…売る…」

呆然として立っている康太に、女は一本の筒を渡した。

「例えばそれ。」

「？」

「蓋を開けてみる。」

恐る恐る、言われたとおり蓋を開けてみる。

すると、ぱちんと言う音と同時に、筒の中が光った。丁度、カメラのフラッシュのような感じた。

「…これが神様…？」

これで信じると言う方が無理である。が、彼女は大真面目に頷いた。

「その証拠に、お前の怪我が治っているだろうか？」

「え？あつ…本当だ…。」

確かに、先ほどまで痣になっていた部分が消えている。消えてはいるのだが

「…しょぼくない？」

「…まあ、否定はしない。」

八百万屋の女は、再び高級ソファーに座った。

「此処にいるのは皆 はたたがみ だ。その効能は蓋を開けてから約一日。時間は短いが力は保障しよう。」

料金は筒の大きさによって変わるが、それくらいなら一週間レンタルで300円かな。」

「…。」

暫くの間、沈黙が続いた。この、はたたがみがあれば、もしや

「あつ！」

康太の中で、先ほどの光が閃いた気がした。

「いじめられなくなる神って、いますか？」

彼女は吸った煙を吐き出すと、嬉しそうに言った。

「毎度あり。」

その日は久しぶりに静かだった。余に静かで、穏やかなので、目に入るもの全てが輝いて見えた。

その日は、久しぶりに心の底から笑うことが出来た。

「またお前か。」

康太はすっかり八百万屋の常連客となっていた。

「うん。明日体育があるから、雨が降るはたたがみをお願い。」

「お前なあ……。」

彼女は筒を選別しながら言った。

「こちら側としては儲かっていいんだが、あんまりのめり込むなよ？」

康太を捕らえたその目は、いつになく真剣な目をしていた。

「はたたがみにも限界がある。」

「大丈夫だつて。」

そう言えば、と、彼は付け足した。

「最近学校の周りで不審者が多いらしいんだ。護身になるような物はないかな？」

「あるにはあるが……。」

その筒を渡すのを、彼女は躊躇した。

「こいつは扱いが難しいんだ。持つもが相手をどう思っているかによって効き目が変わる。」

「平気だよ。いくら何でも不審者に怪我はさせないさ。」

「そうか……。」

この時、彼は何も考えず筒を受け取った。

謀ったとおり、今日は大雨になった。

(よし。これで体育は室内になる。)

護身用の筒もちゃんと持っているし、帰りの心配もない。

早く学校が終わらないものかと思いつながら、外の景色を眺めている時だった。

「おい、康太。」

振り返れば、以前はいじめのリーダー格であった智和が立っていた。

だが、雰囲気がいつもと違う。目がキラキラと輝いている。

いや、違う。これがいつもの智和なのだ。

(しまった！今日は体育の事で頭がいっぱいだったから…)

辛い思い出が次々とよみがえる。

怯えている康太に、智和はニツコリと笑いかけた。

「放課後、空いてるよな？」

薄暗い路地裏に、数人の笑い声が響く。

「うおらー！」

「うっ……」

腹部に激痛が走る。

「康太お前さあ、マジで面白いよなあー」

「いいサンドバックじゃね？」

「だよなー！」

嫌だ。こんな生活

「サンドバックか：なら殴られても何も言えねえよなあ？」

今度は顔を殴られる。それと同時に、筒がポケットから落ちてしまった。

筒がスローモーションのようにゆっくりと落ちて行くのが見えた。

嫌だ。またいじめのない世界に戻りたい。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌

だ
が、遠くで笑い声が聞こえる。筒が落ちる。落ちた衝撃で、筒の蓋

開いた。

汗だくで八百万屋に駆け込んだ人物は顔馴染だった。
右手には空の筒をしっかりと握り締めている。

「やあ康太。今日はどうした。」

その人物は確かに康太なのだが、その顔は死人のように青ざめている。

「い、いじめられて…それで、筒の…あの筒の蓋が…開いちゃっ
て…

何か筒から、化け物みたいなのが出てきて!…それで…」

八百万屋の視線は、実に冷ややかなものだった。

「それで?」

「…そいつが皆を…殺しちゃったんだ…」

荒く呼吸をする音と、時計の針だけが音を成す。

「あのっ!」

「…何か?」

康太はさすがのように彼女を見つめた。

「人を生き返らせる神を貸してください。」

女は煙を吐き出した。

「そんな神はいない。」

「でも神の数は八百万って!!」

「言っただろう?はただがみにも限界がある、と。神はこの世
のありとあらゆる形、自然、力…」

煙管の中の刻みタバコが赤く光る。彼女は再び、ゆっくりと煙
を吐き出す。

「お前、人が生き返ったところを見たことがあるか?」

からん。

康太の手から落ちた筒が、虚しく音を響かせた。

(後書き)

少しは楽しめましたか？
まだまだ文章力がないですが、これから頑張っ
て行きたいと思いま
す！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6289c/>

八百万屋。

2010年12月9日05時02分発行